

快適な森林空間の創造に関する研究 (VII)

— 森林公園に対する都市住民の意識 —

山瀬 敬太郎・乾 雅晴

Keitaro YAMASE and Masaharu INUI

Studies on the creation of forestal amenity (VII)

Consciousness of city-residents for 4 forestal parks

要旨：山瀬敬太郎・乾 雅晴：快適な森林空間の創造に関する研究 (VII) — 森林公園に対する都市住民の意識 — 兵庫森林技研報第43号：15～19、1995 兵庫県内の4カ所の森林公園が利用者にとどのように意識されているかを把握するため、森林の保健休養的な因子あるいはそれに付随する因子として、景観因子、生態系因子、レク因子、利用施設因子、接近性因子の合計5因子を選択し、各因子について、利用者がどの程度の要求を持っており、満足度を得ているかを調査した。その結果、各公園とも景観因子とレク因子に対する要求が高いが、それに対する満足度は、景観因子については満足しているもののレク因子については満足していないことがわかった。また、ある因子で特徴づけられている公園ほど、その因子に対する評価が厳しくなる傾向がみられた。

I はじめに

心のゆとりや健康の増進をはかるといった森林の保健休養的な役割に注目すると、森林は風景を楽しむ場、多様な動植物の保全の場あるいはレクリエーションに利用される場¹⁾の大きく3つに分けて考えることができる。これら3つの場はそれぞれ異なった整備や維持管理を実施した結果として成立するものであるため、森林整備を実施する以前に明確な目標を設定しておく必要がある。ところでこの目標は森林とヒトの相互関係によって決定すべきものと考えられる。つまり森林がおかれている立地条件によって実施可能な森林整備は限定されてくるし、またその立地条件において森林が生態系として安定できる範囲の森林整備であれば、ヒトの側の要求をできる限りもり込んでいくことが、その後の森林の維持管理を継続させていく意味でも重要であろう。

そこで森林整備の目標を設定する上での参考とするため、現存する森林公園が利用者にとどのように意識されているかを把握することを試みた。ここでは利用者として都市住民に注目した。

II 方法

1. 調査場所

今回の調査では、都市住民として姫路市の在住者を対象とした。姫路市は兵庫県の南西部に位置する人口45万人の都市である。調査の実施場所は比較的用户が多

いことを前提として、図-1に示す里山林あるいは都市近郊林²⁾地域(以下、森林地域)に位置するグリーンエコ笠形、古法華自然公園、藤の木山自然公園、姫路市自然観察の森の4カ所の森林公園と、それと対比させる形で都市の中心部に位置するシロトピア公園を選んだ。グリーンエコ笠形は姫路市の中心部である姫路駅から北北東約35km、古法華自然公園は同じく北東約15km、藤の木山自然公園は北東約12km、姫路市自然観察の森は北西約8kmの距離にあり、シロトピア公園は北約1kmで姫路城の北側に位置している。

2. アンケート調査

森林公園に対する都市住民の意識を把握するため、聞き取り方式によるアンケート調査を平成4年から6年にかけての5月あるいは6月の休日に計7日間、5カ所の公園で実施した。

聞き取り項目は、訪問回数、訪問目的、訪問する森林公園を選択する際に優先させる因子(要求度)とそれぞれの公園での各因子における満足度について回答を求めた。ただし満足度について、シロトピア公園での調査は実施していない。森林の保健休養的な因子あるいはそれに付随する因子として、過去の資料³⁾を参考にし、ここでは前述した景観を楽しむ場としての景観因子、多様な動植物の保全の場としての生態系因子、レクリエーションに利用される場としてのレク因子の3つの因子と、森林に付随する形で存在するキャンプ場や遊具施設などの利用施設因子、居住地からの距離といった接近性因子の

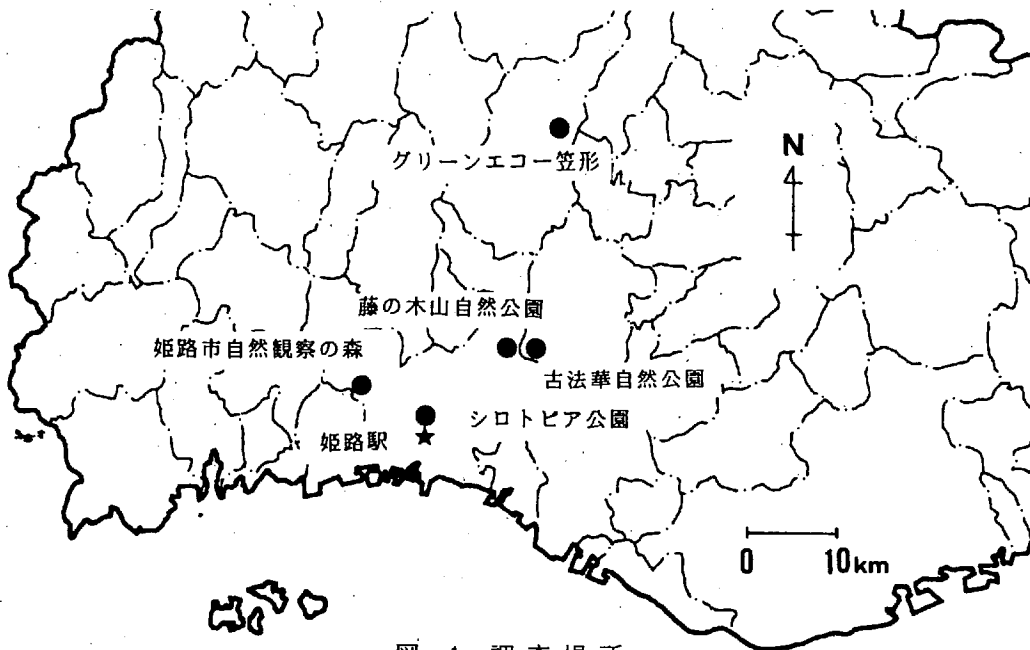


図-1 調査場所

合計5因子を選択した。

回答者のうち姫路市在住者のみを抽出した結果、グリーンエコー笠形が103人、古法華自然公園が117人、藤の木山自然公園が104人、姫路市自然観察の森が112人およびシロトピア公園が93人であった。以下、これらの回答者を対象に分析を行った。

III 結果と考察

1. アンケート回答者の属性

回答者の同伴者を示したのが図-2である。いずれの

場所とも家族単位の利用が多かった。またシロトピア公園では、他の公園と比べて一人での利用が多くみられた。

回答者の訪問回数を示したのが図-3である。森林地域に位置するグリーンエコー笠形、古法華自然公園、藤の木山自然公園、姫路市自然観察の森では、初めて、2~3回と答えた人が多く、シロトピア公園では8回以上と回答した人が全体の60%近くを占めていた。このことは都市住民が都市の中心部に位置するシロトピア公園を日常的な空間として利用しているのに対し、森林地域に位置する4カ所の公園を非日常的な空間として利用していることを示すものと思われる。

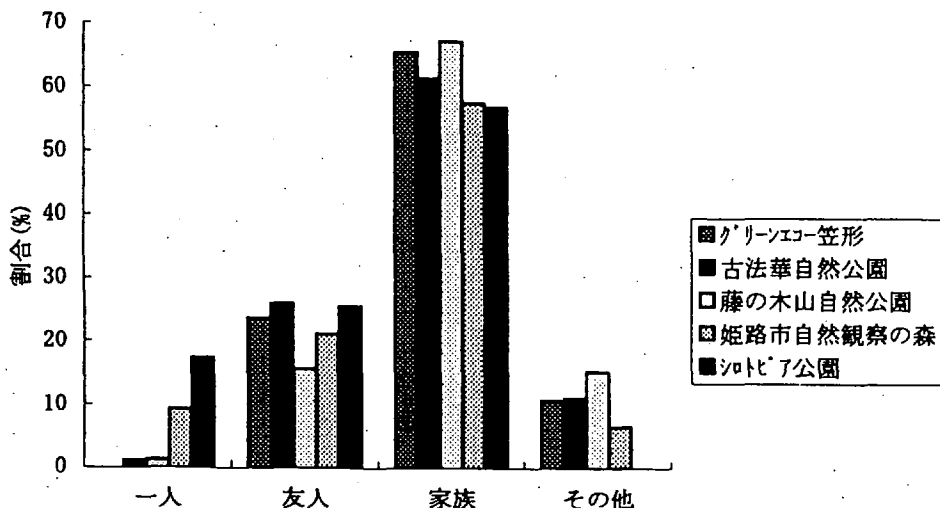


図-2 回答者の同伴者

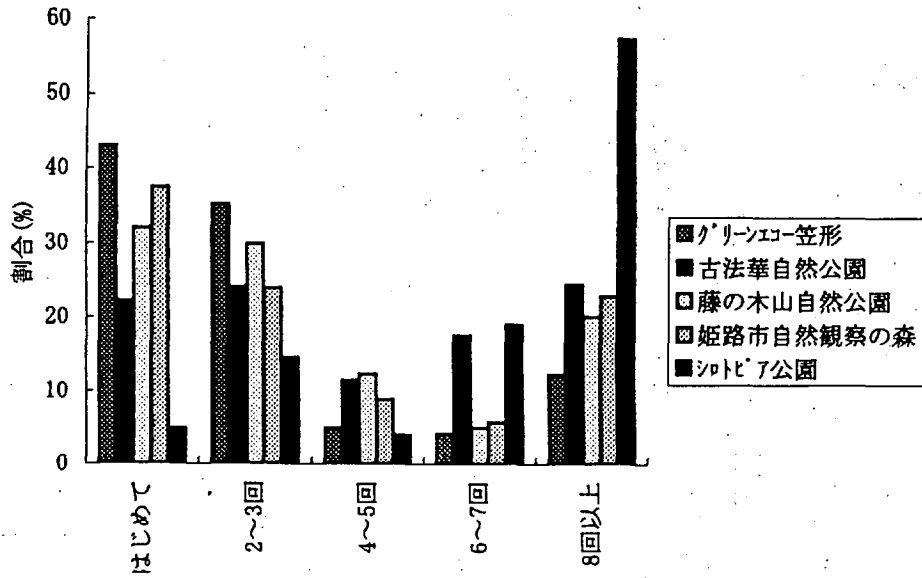


図-3 回答者の訪問回数

回答者の利用目的（複数回答）を示したのが図-4である。森林地域に位置する4カ所の公園の比較では、グリーンエコ笠形で軽いスポーツをすると答えた人が他の公園よりも多く、姫路市自然観察の森で自然と触れ合うと答えた人が他の公園よりも多かった。これはグリーンエコ笠形は他の公園と比べてログハウスやテニスコートなどの施設が充実していること、また姫路市自然観察の森はその名の示すとおり自然観察を目的とした公園であるためと考えられる。

2. 各森林公園に対する要求度

質問は、利用施設が整っている（利用施設因子）、居住地から近い（接近性因子）、景観が美しい（景観因子）、森林の生態系が多様である（生態系因子）、森の中で遊べる（レク因子）の5項目について、利用する公園を選択する際に重要と考えている項目順位の回答を求めた。ここではその公園の内容を知った上で利用していることを前提とするため、2回以上の利用者を対象に分析を試みた。

図-5は各因子の要求度を1位あるいは2位と答えた人の合計した割合を示したものである。

因子別にみると、利用施設因子ではグリーンエコ

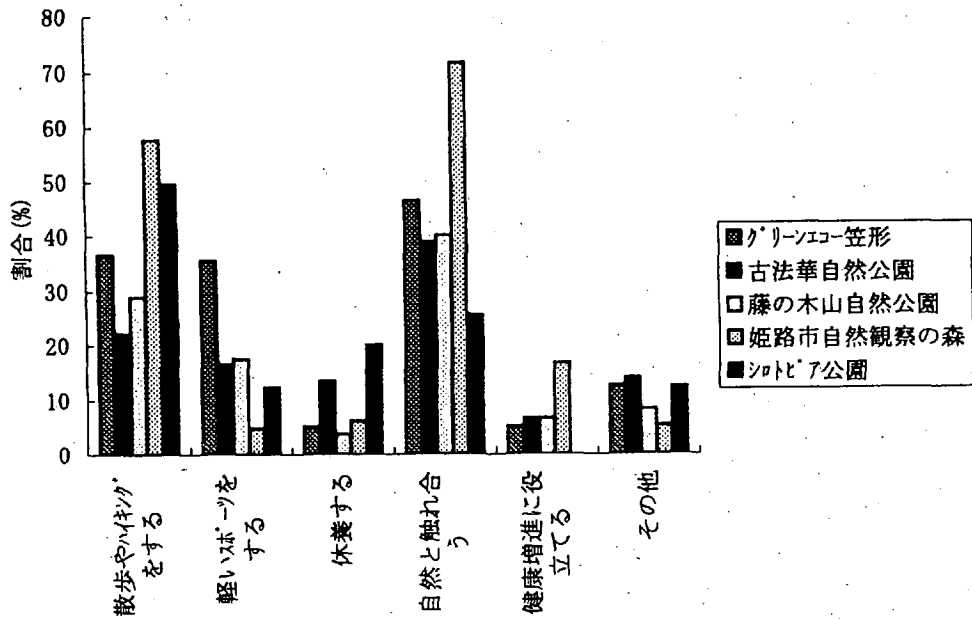


図-4 回答者の利用目的（複数回答）

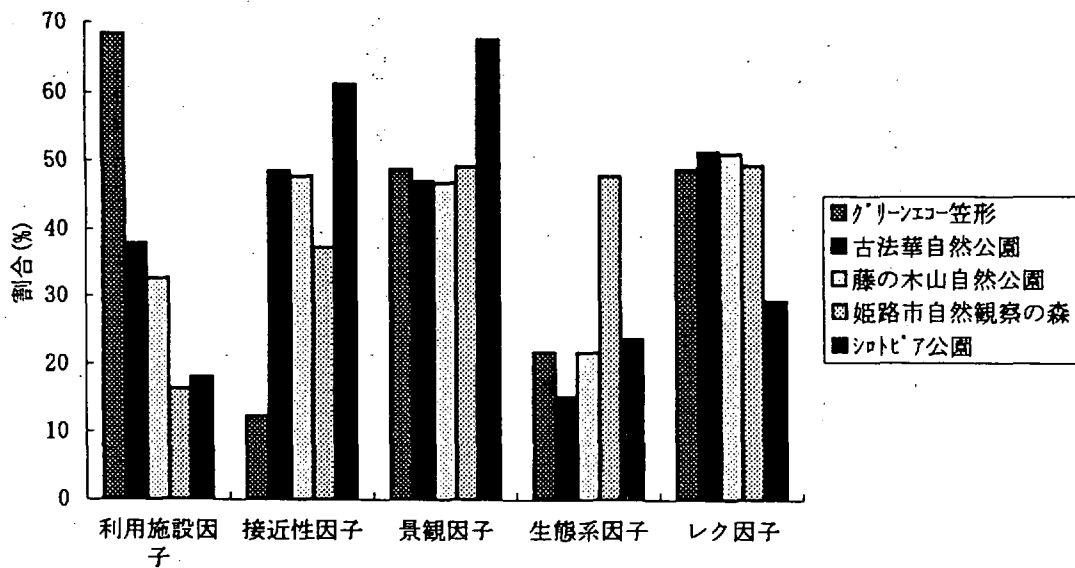


図-5 各因子の要求度

笠形で、生態系因子では姫路市自然観察の森で他の公園よりも高い要求度を示している。これら2カ所の公園ではその内容と利用目的が一致した結果になっており、それぞれの因子に特徴づけられた公園と考えられる。

森林地域に位置する4カ所の公園の利用者は、景観因子とレク因子についてどの公園においても50%近くの割合で要求している。一方、都市部に位置するシロトピア公園では景観因子の要求度が他の公園よりも高く、レク因子のそれが他よりも低い傾向がみられた。

接近性因子では、姫路市の中心部から近い公園での利用者は居住地から近いことを重要と考えている人が多く、中心部から離れた公園の利用者は居住地からの距離をあまり重要な因子と考えていない傾向がみられた。

3. 各森林公園における要求に対する満足度

要求度が高い各因子について、利用者がどの程度満足しているかを把握するため、各因子の優先順位を1位あるいは2位と答えた人を対象に、その因子についてどの程度満足度を感じているかを、非常に満足、満足、少し満足、どちらでもない、少し不満、不満の6段階で回答を求めた。ここでは要求度が高い因子として優先順位の合計した割合が40%以上の因子に注目し、分析を試みた。

図-6は、各因子の優先順位を1位あるいは2位と答えた人のうち、非常に満足あるいは満足と答えた人の合計した割合を示したものである。50%以上の人非常に満足あるいは満足と回答している因子は、森林地域における4カ所の公園での景観因子と、古法華自然公園と藤の木山自然公園での接近性因子であった。また50%

未達の満足度であった因子は、森林地域における4カ所の公園でのレク因子と、グリーンエコー笠形での利用施設因子、姫路市自然観察の森における生態系因子であった。

各公園とも景観因子に対する満足度が高かった。森林地域における4カ所の公園では周辺が森林に囲まれており、それによって安らぎ感を持つといった受動的な利用⁹⁾がなされていることから、景観因子については、樹種構成などの質的なものとしてではなく、量的なものとして捉えられている可能性がある。

一方、レク因子に対する満足度が低かったが、これはいずれの公園とも森の中で遊べる雰囲気ではないことを示すものである。今回の質問において森の中で遊べる公園のイメージがどのように受けとめられていたかについては解析を深める必要があるが、レク因子は今後の森林整備で十分に検討を要する因子であると思われる。

古法華自然公園と藤の木山自然公園における接近性因子に対する満足度は高く、都市の中心部から15km程の範囲であれば、他の因子の評価はともかく、少なくとも居住地からの距離としては満足しているものと思われる。

グリーンエコー笠形での利用施設因子と姫路市自然観察の森での生態系因子に対する満足度は低かった。これらの因子は、前述したようにグリーンエコー笠形あるいは姫路市自然観察の森を特徴づける因子である。このことから公園がある因子で特徴づけられている場合、利用者はより高いレベルのものを要求するようになり、評価も厳しくなるのではないと思われる。

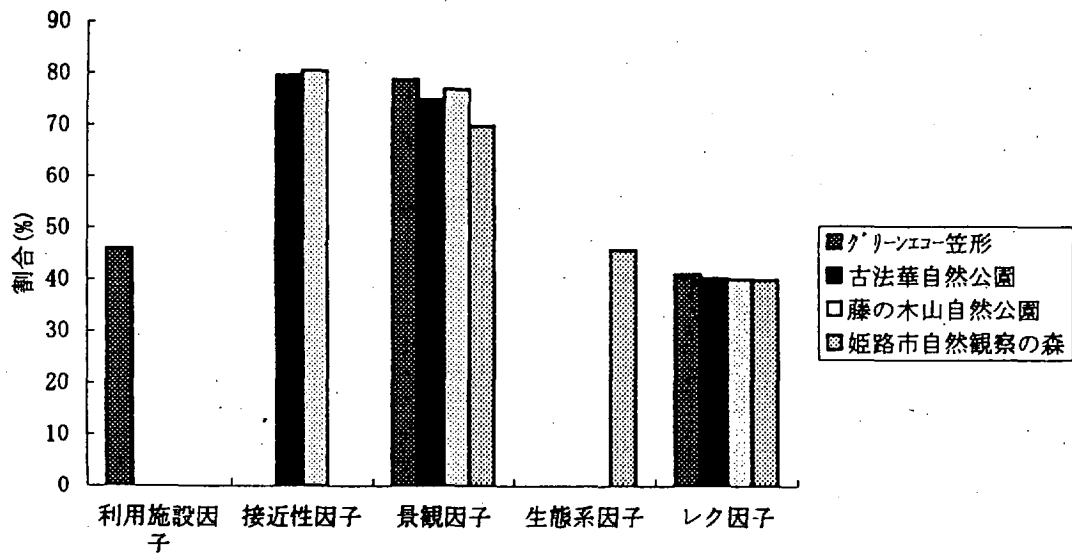


図-6 各因子の満足度
(ただし、要求度が40%以上の因子のみ)

IV まとめ

森林公園の整備目標を設定する上での参考とするため、4カ所の森林公園において、利用者がどのような要求を持っており、どの程度の満足度を得ているかを把握することを試みた。

1. 森林の保健休養的な因子あるいはそれに付随する因子として、景観因子、生態系因子、レク因子、利用施設因子、接近性因子の合計5因子を選択した。
2. 各公園とも、景観因子とレク因子に対する要求が高いが、それに対する満足度は、景観因子については満足しているがレク因子については満足していなかった。
3. ある因子で特徴づけられる公園は、その因子に対する評価が厳しくなる傾向がみられた。

引用文献

- 1) 兵庫県：ひょうご豊かな森づくりプラン 1995
- 2) 農政調査委員会：ポスト4全総時代の森林社会学 95 pp. 日本の農業 168、1988
- 3) 香川隆英・柳 次郎・谷田貝光克：森林の保健休養機能 日本治山治水協会、1989
- 4) 山瀬敬太郎：快適な森林空間の創造に関する研究 (IV) -都市近郊の自然公園の場合- 兵庫林試研報 41、32～37、1994

(平成7年8月31日受理)